

## 230. 壺笠山遺跡・赤塚古墳の 採集遺物

### 1. はじめに

大津市北郊の地は文化財が豊かなところで、比叡山・長等山系と琵琶湖に挟まれた錦織～坂本間の南北約4kmの範囲を限っても、滋賀里遺跡、南滋賀遺跡、壺笠山遺跡、皇子山古墳、赤塚古墳、大津宮錦織遺跡やその関連寺院及び総数700基近く、推定1,000基以上といわれる後期群集墳など数多くの遺跡が存在する。

1990年県文化財指導員に委嘱されたのを機に、パトロールの対象文化財だけではなく対象外の遺跡にも数多く足を運ぶようになり、時折、遺物を採集する機会にも恵まれた。

ここに報告する遺物は、すでに知られている遺跡の年代や性格を変えることになるとは思われないが、新たな知見が加わることにより、当遺跡に対する認識がさらに深まり、論議されるとき資料として役に立てば報告した意味もあろうかと思う。



風害木の伐採がおこなわれた壺笠山遺跡墳丘部  
(1990年12月26日撮影)

### 2. 壺笠山遺跡

ここ壺笠山は、比叡山塊の中腹から四ッ谷川を隔てた独立峰で海拔422.4mをはかり、山裾にある集落との比高差も約300mに及ぶ。文字どおり山城または砦として疑う余地のない景観を備えており、地元では坂本城の出城として言い伝えられてきた。

しかし、1987年梶原大義・義実父子が壺笠山山頂平坦面から十数回にわたって採集してきた遺物を当時滋賀県文化財保護課丸山竜平氏(現、名古屋女子大学教授)に照会し、丸山氏が、その遺物が特殊器台形埴輪では「都月型」かもしれないより古いタイプの文様をもち、壺笠山遺跡は最古の部類に属する径48mの円形墳であると発表された<sup>①</sup>ことから、新たな問題も生まれてきた。

一方、近年扇状地にはりついた旧村の背後を通る161号線バイパスの関連遺跡調査で、太鼓塚古墳群、大通寺古墳群の一部が発掘調査され、下層や谷筋などから弥生土器が相次いで発見されている<sup>②</sup>。これらの土器は弥生時代後期後半の一時期にあてることができ、部屋ヶ谷高地性集落と同時期であることから、宇佐山遺跡中にみられる弥生土器の散布とあわせ、扇頂部や山裾に短期的集落が点々とあったことを推測させ、壺笠山古墳築造の契機をさぐるうえでも注目すべき見となっている。

このような状況のなか、1990年壺笠山の樹木が伐採されているのを知り、当時唐崎小学校児童関戸康之君(1995年1月現在 唐崎中学在籍)とともに山頂へ足



図1 壺笠山遺跡・赤塚古墳とその周辺の遺跡  
1 壺笠山遺跡 2 大谷古墳群 3 赤塚遺跡  
4 大通寺古墳群 5 大谷西古墳群 6 熊ヶ谷古墳群

をのぼし、墳頂部の倒木の根元より遺物を発見し採集に及んだ。

### 3. 壺笠山遺跡の採集資料(図4)

遺物は、過去上部平坦面南西部でみつかったと報告されているが、今回は中央部よりやや北東に偏したところ(A地点・B地点)と墳頂部平坦面より南西側に約14m下った墳丘外斜面(C地点)で発見した(図2)。後者は、1994年の追加表採であるが、前者は、発見時遺物が倒木の根からんでおり、それについている土から判断すると、A地点・B地点ともいずれも表層と思われる黒褐色の腐食土中に含まれており、その下の黄褐色砂質土のほぼ上面ぐらいにあたる。

#### A地点出土遺物

##### (1) 壺形土器

最大4cm×4cmまでの体部と思われる数点の破片である。外面の色調は橙色を示すが、赤色顔料またはその痕跡は認められない。内面は磨滅しており調整は不明だが、外面についてはヘラケンマするものと1cm幅に7~8条のハケメ痕のみられるものがあり、前者の場合、内面の色調は褐灰色で、後者の場合はややおう土色がかかった橙色である。胎土は3mm×2mmまでの砂粒を含み、大粒なものは長石粒で比較的目立つ。他に石英やクサリ礫、細かな雲母片も含まれているようである。器壁の厚さは5mm~7mmを計る。

##### (2) 特殊器台形埴輪

タガをもつ(4)を除いて、すべて外面に赤色顔料またはその痕跡が認められる。外面は7~8条/1cmのハケ目をやや斜方向に施している。文様は(1)、(2)の2点については明確に認められるが、他の2点については判然としない。ただ(4)については微細に観察するとヘ

ラ描き沈線痕らしきものが認められるが、器壁の残りが悪く、それを断定する積極的な根拠をもたない。

明瞭に文様の残る(2)は、2条のヘラ描き沈線文を複合鋸歯状に配するもので、左斜め下にも前者に比べてやや鋭角的に折れ曲がるヘラ描き沈線文がみられる。また、(1)は斜め方向に傾きの異なるヘラ描き沈線文が1条ずつ残るが、右側のそれには断続的な痕跡から平行してもう1条のヘラ描き沈線文があったようだ。

内面は、6条/1cmのハケ目を施すもの(4)とヘラケズリを施すもの(2)、(3)とがあるが、(2)は斜め上方、(3)は横方向に施し、部位のちがいを感ぜさせる。胎土は2mm×1mmまでの砂粒を含み、長石、石英、クサリ礫、雲母片が観察され、壺形土器片とほぼ同様である<sup>9)</sup>。厚さは1.2cmほどであるが、(4)だけが8~9mmとやや薄い。色調は(1)~(3)が褐色で(4)は明褐色である。

#### B地点出土遺物

##### (1) 土師皿

器高は1.8cmほどであるが、推定口径は13.8cmと10.2cmの二種である。ともに内外面はナデ仕上げであるが、(5)は、端部が先細りしておわるのに対して(6)は、厚手のまま丸く収められている。なお前者には、口縁部と底部の境の内面側に強いナデのあとが巡り、口縁部にむかって「ノ」の字状になであげているのが特徴的で16世紀代のものと認めてよいだろう。胎土はきめ細かな砂粒を含み、色調は淡黄褐色である。

#### C地点出土遺物

##### (1) 壺形埴輪(7)

外上方に大きく広がり口縁径が40cm以上と推定される口縁部の破片で、外面に突帯状のものを張り付けることにより二重口縁の形をつくり出している。色調は褐色で、胎土は4mm×3mmまでの砂粒をふくみ、長石、石英の他に雲母片などが混じる。内外面とも磨滅が著しく調整は不明である。器壁の厚さは1cmくらいである。

### 4. 赤塚古墳

壺笠山遺跡から直線距離にして南東へ1.2km、京津線滋賀里駅の北0.4kmのところであり、海拔は110mである。地元では、墳頂部にある倭神社の祠の建て替えの際、朱に塗られた天井石らしきものが現われたという話が残り、竪穴式石室をもつ古墳と考えられている。

年代や墳形については、上記の内部構造と地割から前期の前方後円墳という説や中期初頭ごろの前方後円墳または帆立貝式古墳という説があったが、丸山氏は測量結果と古富波山古墳の



図2 壺笠山遺跡遺物表採地点(“アミ目”は梶原氏発見地点)  
(大津市埋蔵文化財調査報告書2より引用、一部加筆)

例から、最古式の円墳と主張された④。

### 5. 赤塚古墳の採集資料 (図4)

紹介する2片の埴輪は、ともに1994年1月墳頂部平坦面より少し下った東斜面で表面採集したもので、北側のものを(8)、南側のものを(9)として紹介する。

#### 円筒埴輪

採集したものは、筒部(8)と基底部(9)で、後者は断面観察から、粘土を2枚貼り合わせるにより底部にかかる重みに耐えられるよう強くしていることが明瞭に読み取れる。外面は、両者ともこの面を露出させていたせいか磨滅が進んでいるが、よく観察すると、11~12条/1cmの非常に細かなハケ目がやや左上がりに見られるところがある。内面はハケ目らしきものがかすかに窺えるのでハケ目調整後ナデにより仕上げているものと思われるが、(8)はナデによる仕上げが斜方向にはっきりと見られるのに対して、(9)は平滑に仕上げている。色調や胎土については、(8)が、外面乳橙色、内面淡褐色で2mm×1mmまでの砂粒を含み、(9)は内外面とも橙色で1.5mm×1.5mmまでの砂粒を含む。長石や雲母片などが観察できる。厚さは、(8)が1.5cm、(9)が1cm——但し補強部は1.7~2cm——くらいである。

### 6. 埴輪片についての考察

まず、壺笠山遺跡で採集した特殊器台形埴輪について考察する。わずかな資料であるため断言は避けたいが、(1)について言えば都月型埴輪の斜線部分の一部が残ったとする解釈が可能と思われる。しかし、文様の明瞭な(2)については、丸山氏の報告⑤の中にも現在知

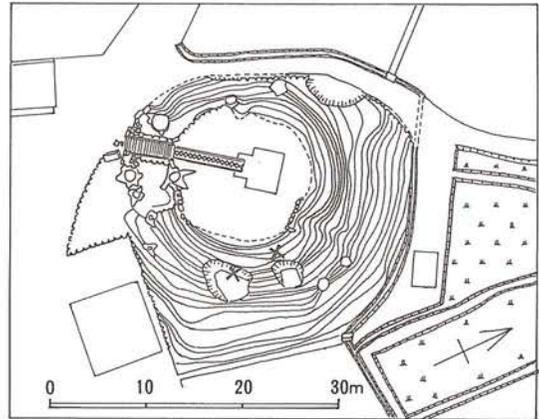


図3 赤塚古墳遺物表採地点(×印)  
(皇子山だより第28号の実況図に一部加筆、修正)

られている立坂型~都月型の特殊器台形土器~特殊器台形埴輪の変遷の中にも同種のものを見出すことはできない。ただ、権現山51号墳の報告書⑥のなかにわずかにこの文様を連想させるものがある。図5は権現山51号墳出土埴輪の復元図のひとつであるが、斜線の一部が省略され、点によって影をつけた部分が文様として残ったものという解釈はどのようなものであろうか。もし、この解釈が許されるなら、(2)の埴輪片は都月型でもやや後出的な要素をもつことになり、丸山氏が指摘した「明らかに都月型より古いタイプ」のもの⑦と矛盾するが、箸墓においても都月型の他に宮山型をもつことが知られており、型式差があっても不思議ではない。そして、壺笠山遺跡の場合、この型式差を文様の一部省略をもって熟練した工人とそうでない工人との

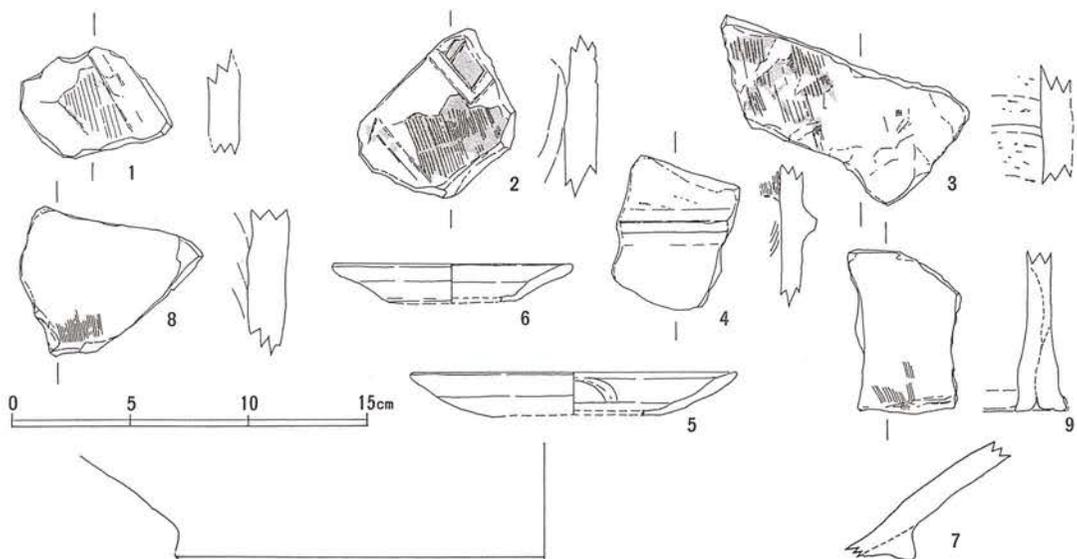


図4 壺笠山遺跡・赤塚古墳 表採遺物実測図(“アミ目”は赤色顔料残存部分)

技術の差とすることも可能であるが、二次的な埋葬などに伴う時期的な差と考えた方が自然であろう。

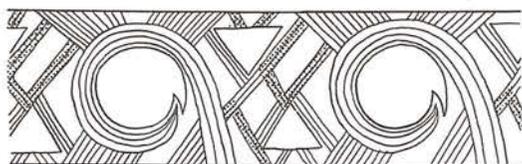


図5 権現山51号墳出土特殊器台形埴輪文様復元図  
『権現山51号古墳』より引用一部加筆

次に、赤塚古墳の埴輪であるが、後期特有の底部調整が見られないこと、タテハケメが2片とも見られヨコハケメが見られないことから、4～5世紀の中でもヨコハケメの出現頻度がまだ低い段階と考えたいが、時期決定は控えたい。

## 7. むすびにかえて

最後に、特殊器台形埴輪がみられる壺笠山遺跡について一言述べ、むすびとしたい。

壺笠山遺跡は、城または砦と古墳の複合遺跡であるが、図2を見てもわかるように、墳丘部より西南方向にのびる尾根筋に張り出しが見られる。ところが、その部分は「曲輪」<sup>⑧</sup>によって削平され、元来の地形をとどめていない。そこで、いま仮に比較的元の地形を保っていると思われる尾根筋の小径にそって貼り出し部の直線的な落ち込み部まで線を引き、墳頂部の中心からその落ち込み部のラインに垂直に結ぶ線を対称の軸として線対称になるよう反転すると、前方部のような形状になる。その際、-5m付近の平坦面は段築または犬走り様のものと捉え、墳丘の裾を無理のない-10m近くまで下げてみると、後円径約60m、前方部長約43m、全長約100mの前方後円墳がえられることになり(図6)、採集した壺形埴輪も、表採のため墳頂部から

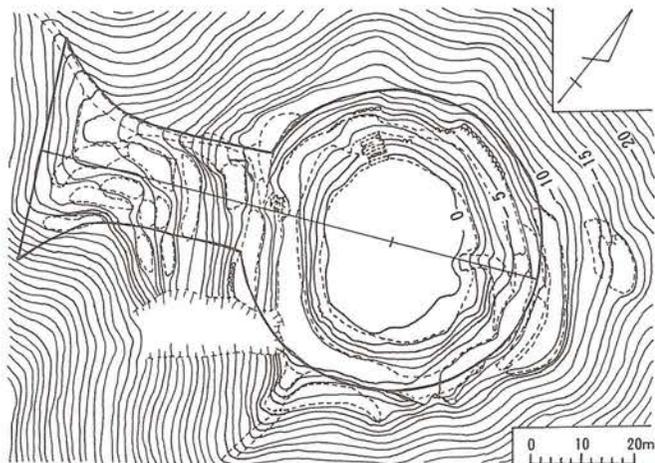


図6 壺笠山古墳推定復元図  
(大津市埋蔵文化財調査報告書2より引用、加筆)

の転落の可能性が大きいが、くびれ部付近からの検出となる。

傾斜面に前方後円墳を築いたとき、前方部の裾が等高線で後円部の裾とうまくつながらないことは、しばしばみられるが、これはあまりにも等高線を無視した考え方であるし、また現地踏査でも前方後円形はたどれない。しかし、戦国時代の改変がどの程度行われたかを知ることのできない現在、前方後円墳を視野に入れながら検討することが必要ではないだろうか。埴輪の評価とともに諸氏の批判を請いたい。

本報告にいたるまで、私に学習の機会を与えて下さった青山 均・小笠原好彦・栗本政志・高橋克壽・田中久雄・吉水真彦の各氏に感謝したい。

(中西 常雄)

## 註

- ① 丸山竜平 「壺笠山遺跡の発見の意義をめぐって」(『皇子山だより』第39号 皇子山を守る会 1987)  
丸山竜平・梶原大義 「大津市発見の特殊器台型埴輪」(『季刊 考古学』第20号 雄山閣 1987)
  - ② 田中久雄・大崎哲人・福田 敬の各氏の御厚意により実現した。
  - ③ 大津市教育研究所科学館指導員の坂田音二郎氏に鑑いただいた際に、本文に記した砂粒の他に「何かが酸化したものかもしれないが、ざくろ石が混ざっているようだ。仮にざくろ石だとすると二上山を思い浮かべる。」という感想をいただいた。今後の課題としたい。
  - ④ 丸山竜平 「湖西地域最古の古墳はどれか」(『皇子山だより』第28号 皇子山を守る会 1984)
  - ⑤ 丸山竜平 「大津市壺笠山古墳の特殊器台型埴輪について」(『究班・埋蔵文化財研究会15周年記念論文集』1992)
  - ⑥ 『権現山51号墳』刊行会『権現山51号墳』1991
  - ⑦ 丸山竜平 「巨大古墳の発生—近江壺笠山遺跡 埴輪 起源—」(『東アジアの古代文化』夏・52号 大和書房 1987)
  - ⑧ 中村博司氏より、「曲輪」跡というよりも関東の山城でよくみられ、関西でも最近発見されている「うね状のほり」に似ているとの指摘を受けた。
- ※ ここで報告した遺物については、現在大津市立唐崎小学校資料室の陳列ケースに保管されている。